

【研究主題】

「生徒の視野を広げる俳句指導～イメージマップによる言葉の選択と添削指導～」

小千谷市立小千谷中学校

中山 陽月(令和5年度)

【主張】俳句鑑賞における「3点イメージマップ」の活用と、俳句創作における「添削指導」を用いることで、視野が広がり、子どもの語彙が豊かになり、表現力が向上する。

I 研究主題設定の理由

1、教育界の流れから

中央教育審議会答申では、「学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある。」と指摘されている。そして国語科学習指導要領では、「語感を磨き語彙を豊かにするためには、語句の量を増やすことと、語句についての理解を深めることの両面が必要である。」と述べられている。しかし、現状では授業内で十分に語彙に関する指導を十分に行うことができず、社会的にも子どもの語彙の貧弱さが問題視されているのが現状である。そのため、語彙を豊かにすることは現代の国語教育にとっても大きな課題の一つである。

2、自身の実践と俳句選択

これまでも「視野を広げる」をテーマに鑑賞文などの実践を行ってきた。しかし、作文では、段落の構成を整えることや文字数を達成することが目的となってしまう、語彙を豊かにして表現力を高め、視野を広げる段階にまで至らなかった。そこで、俳句に注目した。俳句は五・七・五の十七音という極限まで制限された文字数で表現する。情景や自らの思いを表現するためにより適切な表現や考えを選び抜き、考え抜く力をつけることができると考えた。

II 目指す生徒の姿と方策

中央審議会答申と自身の経験をもとに、目指す生徒の姿を「イメージマップや俳句添削をもとに、より適切な表現と言葉を考え、選び抜く生徒」とする。また国語科としての育成を目指す能力については、「知識・技能エ(ア)」「読むことエ」を中核とした。

1、解釈における3点イメージマップについての活用

本実践では、グループでの情報共有を目的に3点イメージマップを取り入れた。

イメージマップでは、初句・二句・結句の3点をそれぞれスタートとし、それぞれの言葉をつながげながら、情景や感情を連想できるようにした。

また、グループでイメージマップを共有し、共通点と相違点を見つけさせることで、自らの感じ方を客観的にとらえし、新たな感じ方のきっかけとなることを目指した。

俳句は十七音で表現される言葉同士がつながって一つの情景や思いが浮かび上がる文学である。そこで、言葉と言葉を視覚的につなげることによって、新たな解釈を探り、それをグループで共有することで視野が広がると考えた。

2、創作における添削指導

本実践では、抽出生徒数名の作品の添削を外部講師に依頼した。外部講師は、小千谷市で活動する俳句サークルの一つの元代表である。小千谷市民会館を通じてコンタクトを取った。その際以下の4点について確認した。

- ① 表現したいことがわかりやすく俳句にできているか。
- ② 表現技法や切れ字を適切に使えているか。
- ③ 俳句の約束事が守れているか。
- ④ 五感や5W1Hといった情報を適切に盛り込んでいるか。

抽出された生徒以外も添削された作品を見返しながら、再度俳句を創作することの中で、自らの作品をよりよくする手がかりを得て、より適切な表現や言葉を考えぬき、選びぬく力がつくと考えた。

III 分析方法

- ① 3点イメージマップを比較した時に使用した、ワークシートの記述から、新たな視点が得られているかを分析する。
- ② 添削を受ける前後での作品の変容を分析する。

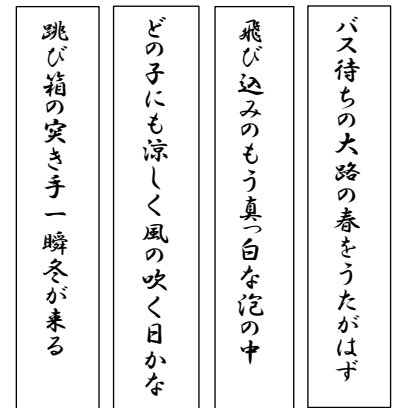
IV 研究の実際

1 授業実践① イメージマップを広げて、比べて俳句を解釈しよう！

本実践では、生徒が教師の示した、四つの俳句のうち一つを、イメージマップを書きながら解釈することで、視野が広がるだろうと考えた。そして、できあがったイメージマップをグループで比較することで、新たな見方や感じ方に触れる、起点とした。また、それらを基に自らの解釈を文章に起こすことで始めた俳句に触れた時と解釈した後での変容に気づけるだろう。最後に振り返りアンケートにより、自らの視野が広がったかどうかを確認できるようにした。

(1) 4つの俳句選択の理由

今回は、教科書『俳句十句』の鑑賞に入る前段階として、「想像が広げやすい」という観点で教師側が選んだ4つの俳句を提示し、そのうちの一つを生徒に選ばせ、解釈を行った。「想像を広げる」とは、「五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）」や「5W1H（いつ、どこ、だれ、なに、なぜ、どうやって）」を観点に直接俳句には描かれていないものを想像することを言う。

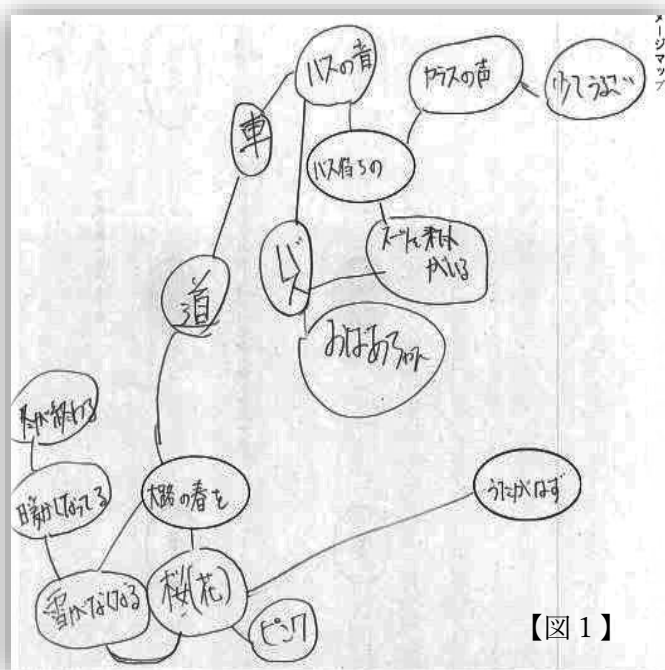


(2) 3点イメージマップを広げて

3点イメージマップでは、図1のように三つの丸の中にそれぞれの句を書き込み、そこから言葉をつなげながら連想していくことにした。

図1からは、「バス待ちの」からバスの音（聴覚）へと創造を広げ、車、道と連想し、道と「大路」をつないでいる。

また、図2からは、「もう真っ白な」から「頭の中が真っ白」「飛び込みに失敗してびっくり」（なぜ）やそこから「飛び込みの」とつなげ、「バシャーン」（聴覚）「プール」（場所）などを連想していた。これらは、俳句



【図1】



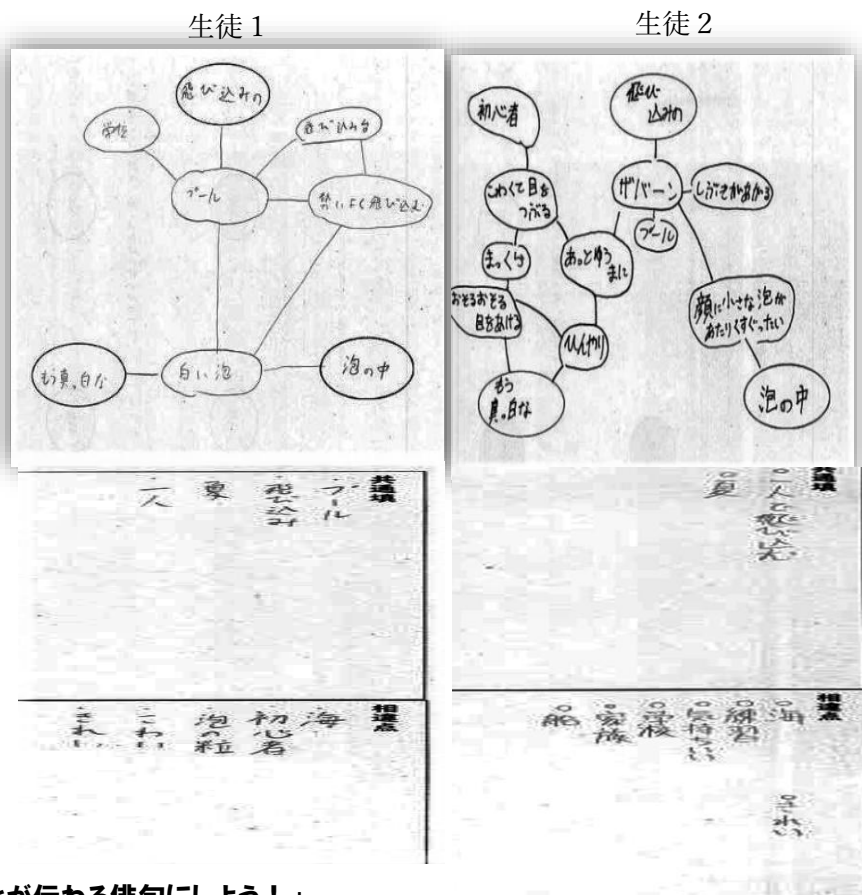
【図2】

には直接表現されていないものであり、イメージマップを使い、想像を広げていったことがわかる。

(3)3点イメージマップを比べて

イメージマップを一通り書き終わったあとに、同じ俳句を選んだ生徒同士で3～4人のグループを作り、イメージマップを比較し、共通点と相違点をまとめた。

生徒1は生徒2から飛び込みを行っている人物が「初心者」とあるという視点を手に入れている。そして、そこから「プール」「あ」という間などの場所や時間を手掛かりに「こわい」という感情にたどり着いていることがうかがえる。また、生徒2においては、「ザバーン」という水しぶきを表す言葉と「泡の中」という言葉の間に「顔に小さな泡があたりくすぐったい」という感覚を連想している。この泡の感触に関しては生徒1も生徒2から「泡の粒」という言葉を知り、後に書いた文章でも「白い泡を作りながら泳ぐのは気持ちがいい」と言及している。



2 授業実践②「添削を生かして、より伝えたいことが伝わる俳句にしよう！」

俳句を創作し、添削された俳句における表現の取捨選択により、思いが伝わりやすくなることに気づき、それを基にさらに俳句を作句することで、語彙が豊かになり、表現力が向上するだろうと考えた。

(1)俳句創作1回目

俳句の既習事項①～⑤を生かして、俳句の創作を行った。テーマに関しては特段決めずに、自分が感じたことをそのまま俳句に表現するよう伝えた。

【俳句の既習事項】

- ① 五・七・五の十七音であること。
- ② 季語を必ず入れること。
- ③ 五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）を意識すること。
- ④ 5W1H（いつ・どこ・だれ・なぜ・なに・どうやって）を意識すること。
- ⑤ 切れ字や句切れを意識すること。

俳句の基本事項を定着させるため、既習事項①、②は必ず取り入れるようにした。

既習事項③～⑤に関しては、最低一つは意識するよう伝えた。その結果、以下の生徒作品が出来上がった。

【生徒作品】

- | | | | |
|------------------|------|----------------|------|
| ・青空が見守っている運動会 | 生徒 A | ・冬の朝白い宝石降り落ちる | 生徒 B |
| ・秋の夜虫の歌声響かせる | 生徒 C | ・冬景色教室の中外を見る | 生徒 D |
| ・外を見て屋根に積もった落ちる雪 | 生徒 E | ・朝の道にぎやかな声と学校へ | 生徒 F |

(2)俳句添削

俳句創作1回目を受けて、教師が選択した10句を添削してもらった。講師には、来校していただくことがかなわなかったため、メールでデータを添削となった。

※生徒作品例の中では、生徒 A・B・C が添削対象作品である。

添削では、比喩表現や言葉の選択がよい点としてあげられている。また、課題として情景の具体化や作品の一貫性などがあげられていた。また、作品全体として、情景がよく描かれている一方で、気持ちや感情が読み込まれている句が少ないとの指導があった。

(3) 俳句創作2回目(1回目との比較)

添削を受けて再び俳句の創作を行った。添削された十句をグループごとに見合い、気付いたことを共有し、その後、2回目の俳句創作に取り掛かった。グループ活動では、「季節を安直に表現するのではなく、別の言葉を使うと伝わりやすい。」「同じような言葉でも比べてみると伝わり方の違いが出てくる。」「そんなに難しい言葉を使わなくても大丈夫」「対比や比喩などを使うとより分かりやすい」などの発言があり全体で共有した。そのうえで、再び作句したところ、以下のような生徒作品が見られた。

【生徒作品】

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| ・新学期ドキドキ胸にくぐる門 生徒 B' | ・セミの音や響きわたるよ授業中 生徒 D' |
| ・外眺め落ちゆく雪と思い出と 生徒 E | ・運動会しみこむ汗は装身具 生徒 F' |

生徒 B は、「緊張」や「不安」といった言葉ではなく、行動から事物への仮託という表現技法を用いて表現している。また、「ドキドキ」という擬態語を選択していることから、期待や不安、興奮などが入り混じった感情をより鮮明に描写しようとしたことがうかがえる。

生徒 D は、切れ字の効果を考えて、使用していることがわかる。そして、安易に「夏」とせず、「セミの音」という言葉を選択することで、より具体的に情景を描写している。

生徒 E は、「落ちる」を「落ちゆく」にすることで、今まさに雪が落ちているその瞬間を描写しようとしていることがわかる。また、「思い出と」という言葉を最後に置くことで、「雪」のはかなさと「思い出」のはかなさに共通点を見出している。

生徒 C は「汗」を「装身具」に例えている。「汗」といえどどちらかといえば、「汗臭い」「暑苦しい」といったイメージになりがちだが、「装身具」に例えることで、運動会に本気で臨む姿の美しさを表現しようとしている。本来であれば「アクセサリー」などの言葉が思いつきそうところだが、五・七・五という制限により、「装身具」という言葉を使った。

また、全体的に俳句を体言止めで終えている句がとて多くなった。添削指導の依頼にあったように、伝えたいものをより明確化していく過程で、体言止めという技法にたどり着いたことが分かった。

本実践では、添削指導から得た気づきを基に、生徒が表現の幅を広げ、言葉を取捨選択しながら俳句を創作していったと考えることができる。

V 成果と課題

今回の研究で、俳句指導における、視野の広がりや語彙と表現力に及ぼす影響について深く考えることができた。イメージマップの活用においては視野の広げ方を、添削指導においては表現と語彙の取捨選択の力をある程度高めることができたと考える。しかし、語彙や表現の指導というものは本来は継続的に行われなければならない。今後は、表現指導や語彙指導をどのように日常的に取り入れていくかを模索していきたい。

◎青空の大きさと中学生との対比がよい。	◎表現〇 ◎中学生らしい言葉の選択
青空が 見守っている 運動会	
◎「雪を別のものに置き換えたため、想像しやすくなった」	◎「雪」とおかなかつたのは〇
・冬の朝 白い宝石 音もなく(宝石との対比)	冬の朝 白い宝石 擬音や擬態にしてもよい 降り落ちる
なんの虫かはつきりと書いてもよい	◎表現〇
秋の夜	虫の歌声 響かせる
◎「虫の歌声響かせる」という表現がとてもよい	
(う)の言葉で印象が変わる	
・すずむしが 自慢の歌声 響かせる(虫を明記)	